



大阪府立急性期・総合医療センター

〒558-8558 大阪市住吉区万代東3-1-56
TEL:06-6692-1201 / FAX:06-6606-7000



耳鼻咽喉・頭頸部外科 主任部長 さかた よしはる 坂田 義治

各科と連携した高い総合力で幅広い疾患に対応

—新たな診療体制の構築めざし、人材育成にも注力—

■病院の沿革

大阪府立急性期・総合医療センターは、大阪の上町台地の一画、大阪市の南部、住吉区にあります。近くには住吉大社があり、古くは紀州、熊野三山へ通じる熊野街道沿いに発展してきた歴史的な町並みが残る地域です。周囲には万代池や帝塚山などの閑静な住宅地域がある一方、天王寺などの下町らしいにぎわいも感じることができる土地柄です。Jリーグサッカーチームであるセレッソ大阪の本拠地で、サッカー日韓ワールドカップが行われた長居競技場もすぐ近くにあり、病棟から見渡すことができます。

当センターは1955年（昭和30年）1月に「大阪府立病院」として開院し、半世紀にわたり大阪府民に対し、救急救命医療、急性期医療、がん医療、高度医療、難病医療などの専門医療を提供する病

院として使命を果たしてきました。総合病院として有機的一体的な診療体制で多様な医療ニーズに対応するとともに、安全で質の高い医療を提供するために、救急医療部門、専門医療部門、中央部門、高度医療センター、障害者医療・リハビリテーション医療部門の5部門に体系化し、28診療科を有しています。

急性期医療部門は特に充実しており、高度救命救急センター、救急センター、脳卒中センター、心臓血管センター、小児医療センターの部門が整備されています。屋上にはヘリポートも設置され、近畿一円から救急患者を受け入れています。専門医療部門は28診療科がそれぞれの高度な専門医療を行う一方、複数診療科が緊密に協力し集学的治療を積極的、効率的に行うために高度医療センターを設けており、現在は、腫瘍センター、乳がん治療乳房再建センター、人工関節センター、消化器内視鏡センター、糖尿病生活習慣センター、腎（透析）センターを設置しています。また、大阪府立身体障害者福祉センター附属病院の合併に伴い、急性期から回復期に至る一貫したリハビリテーション医学を実施しています。

病院の理念は「急性期医療から高度な専門医療まで、総合力を生かして良質な医療を提供すると



桜のころの病院玄関前

ともに、医療人の育成に貢献する」と表されています。さらに基本方針として「安全・安心で、質の高い全人的医療を行います」「人の心を大切に、信頼される医療を行います」「自己研鑽に励み、かつ人材の育成を行います」とうたわれています。

病院建物は本館完成から18年を経て、若干古さを感じるようになってきましたが、近年はローンやタリーズコーヒーの誘致、カレーや寿司などのテイクアウトショップの開店、玄関ロビーの改修で落ち着いた雰囲気となり、現代美術ギャラリーの設置、コンシェルジュの採用などによりアメニティーが大きく改善され、現代風の病院へ変貌してきています。

現在の病床数は768床で、2010年度の新入院患者数は17,361名、外来患者数は284,457名、手術件数は6,137件でした。

■耳鼻咽喉・頭頸部外科について

当科は前任の宮原裕部長の在任中の2006年に、名称を耳鼻咽喉科から耳鼻咽喉・頭頸部外科に変更し、「がん診療拠点病院」として重点的に頭頸部がん治療を行ってきました。現在、私が主任部長として赴任して約2年になり、頭頸部がん診療が中心であることは変わりませんが、救急疾患への対応、鼓室形成術などの耳科手術、内視鏡下副鼻腔手術、頭頸部外傷手術、嚥下関連手術などにも力を入れています。

手術以外にも糖尿病代謝内科、心臓内科、腎臓高血圧内科などと連携し、睡眠時無呼吸症候群外来を開設し、睡眠時無呼吸症候群に対して検査、CPAP治療、手術治療を行っています。また、2011年7月より甲状腺外科外来を開設し、超音波検査枠の拡充、放射性ヨード内用療法を導入など甲状腺がん治療やパセドウ病手術などへの体制を充実させています。

当センターは救急からリハビリまでの高い総合力が特徴で、各診療科との連携も非常にスムーズであるのが大きな利点です。合併症妊娠、産科救急への対応や、総合病院の中に精神科閉鎖病棟を



多職種による病棟での嚥下回診

持つ利点を生かし、精神科入院中の身体合併症患者への診療ができるなど、各科の高いレベルでの総合的な診療が可能です。このように種々の合併症を持った耳鼻科疾患への対応が可能であることが当科の特徴の一つに挙げられます。

また、ただ高い医療レベルを目指すだけでなく、安全、安心で心の通った医療を実践すべく、安全を考慮した医療、患者さんとの信頼関係をもとに心の通った診療の実践を心がけています。

当科の病床数は24床で、2010年度の外來患者数は11,503名、入院患者数は564名、手術件数は年間454件です。近年は手術症例が増加し、手術待ちが3ヶ月以上となり、緊急性の高い手術が重なった場合のスケジュール調整が困難となってきました。今年度に入り手術枠を増やしていただき、その結果、今年の4月から7月の4ヶ月間の手術件数がちょうど200件となり、年間600件ペースに増加してきています。

■スタッフ、施設認定

2011年8月現在のスタッフは常勤医師5名で、私、坂田のほか、長井美樹医長、榎本圭佑診療主任、上塚学医師、武田和也医師となっています。その他の専任スタッフとして聴力検査技師1名、秘書1名の陣容となっています。

外来は月・水・金曜日に各3診で行っており、火・木曜日は終日手術のみとなっております。外来は原則として行っておりませんが、近隣の医療機関からの要請にはできるだけ対応し、急患などは受



頭頸部外科手術

け入れるようにしています。毎週水曜日夕方には定例カンファレンスを開き、手術予定症例や特殊例、重症例などの検討を行っており、必要時には放射線治療科、外科、形成外科、脳外科など他科医師にも加わっていただいています。木曜日早朝に病棟回診、金曜日午後に病棟カンファレンス、月曜日午後には嚥下チーム回診を行っています。

施設認定としては日本耳鼻咽喉科学会研修施設、日本気管食道科学会専門医研修施設、日本頭頸部がん学会研修施設、がん治療認定機構研修施設などの認定を受けています。さらに、耳鼻咽喉科としては珍しく、日本内分泌・甲状腺外科学会研修施設認可を受けているほか、日本甲状腺学会専門医の研修も可能となっています。

■診療の特徴

1. 頭頸部腫瘍疾患

頭頸部悪性腫瘍に対する治療は、音声や嚥下などの機能、顔面や頸部の形態なども考慮し、根治性と機能維持を常に念頭に置かねばなりません。また、患者さんの希望や家庭背景、社会背景、退院後の生活状況などを考慮しつつ、患者さんやご家族とも親密にコミュニケーションをとり、治療方針を決定するなど、患者さんとともに治療をするスタンスで治療に当たるように心がけています。

治療には他科とも連携し、形成外科による遊離組織移植による再建術、脳外科と共同で頭蓋底手術、放射線治療科によるIMRT、セルジンガー法による動注化学療法、下咽頭癌喉頭癌での部分切除による喉頭温存手術、喉頭鏡下手術による部



ナビゲーションを利用した内視鏡下手術

分切除術など、さまざまな状況に応じた、患者さんのニーズに合った治療ができるように心がけています。頭頸部悪性腫瘍の2010年度新患者数は133名でした。

2. 甲状腺外科外来

従来、頸部超音波検査の耳鼻科への割当枠が週に2時間程度で、十分な数をこなせなかったものを拡充し、月・水・金曜日の午後1時から5時まで検査が行えるようになりました。さらに処置用エコー室が整備され、十分なスペースの検査室で穿刺吸引細胞診を落ち着いて行うことができました。検査枠の拡充に伴い症例数も増加し、甲状腺手術件数も、2010年度の年間18件から最近4ヶ月で20件と増えてきています。手術は喉頭、気管浸潤に対する気管再建手術や音声再建手術、開胸による縦隔郭清術などにも対応しています。また、バセドウ病に対する甲状腺亜全摘手術も行っています。

本年7月から甲状腺外科外来を開設しました。月・水・金曜日に甲状腺外科外来新患枠を設け、初診日のうちに甲状腺超音波検査、穿刺吸引細胞診検査、血液検査を行い、次回受診時には診断結果をお伝えできるようにしています。現在、放射性ヨード内用療法導入の申請をしているところで、年明けには開始できる予定です。

3. 気管、嚥下関連

院内の気管切開は、救急科などを除き大多数を当科で行っており、年間の気管切開手術数は毎年80件前後あります。術後の気管カニューレ管理も行っており、入院主科の担当医と連携し、気管切

開孔の管理などをサポートしています。

嚥下障害への対応では、耳鼻科医、神経内科医、リハビリ医、歯科医、言語聴覚士、嚥下認定看護師、栄養士、歯科衛生士、病棟看護師という専門多職種から構成される嚥下チームによる回診を行うなど恵まれたサポート体制を持っております。われわれも積極的にベッドサイドにて嚥下内視鏡検査を行いながら総合的な嚥下評価に携わっており、耳鼻科医として他科医への確かな助言ができるよう日々努力しています。

また、大阪府下や阪神地域など広範囲に及ぶ患者さん、在宅関連の医療施設や病院から、嚥下改善手術や誤嚥防止術などの嚥下に関する相談や手術依頼があることが特徴といえます。2010年度の嚥下関連手術は15件でした。

4. 耳科手術

2010年度の真珠腫性中耳炎、慢性中耳炎、耳硬化症、耳小骨奇形などに対する耳科手術件数は44件でした。また、顔面神経麻痺に対しては、初期治療としてステロイド剤、抗ウイルス剤による治療を行い、ENoG検査で予後不良と判定された場合には積極的に顔面神経減荷手術（7件）を行っています。

5. 鼻・副鼻腔手術

分野別の手術件数としては一番多く、2010年度は内視鏡下副鼻腔手術が125件、粘膜下鼻甲骨切除術が88件でした。内視鏡下での眼窩吹き抜け骨折整復術、涙嚢鼻腔吻合術、乳頭腫症例での上顎洞内側壁切除術、前頭洞手術なども行っています。必要に応じてナビゲーションも利用し、安全確実な手術を心がけています。

6. 頭頸部外傷

2010年度の外傷関連の手術は10件でした。側頭骨骨折による顔面神経減荷術、外傷性伝音難聴の耳小骨再建、吹き抜け骨折、頬骨骨折、喉頭外傷などです。

■今後の課題と抱負

今日の医療は日々ますます進歩、発展していき、新しい知識や技術の習得に休む暇はありません。医療を取り巻く環境は厳しく、高度な医療を求められることはもとより、十分なインフォームドコンセント、安全の管理、医療経済への配慮などを日々こなさなければならず、仕事量は増加する一方です。

そうした中で疲弊することなく質の高い、安全な医療を持続的に提供していくことが最重要課題です。そのためには効率的でストレスの少ないシステムの構築、さらなるマンパワーの強化、そしてモチベーションの維持が必要です。効率的なシステムの構築にはさらなる病診連携の推進、業務効率化のための手順やマニュアルの作成、クリニカルパスの見直し、安全な医療を考えた機器の導入、医療秘書の活用など、新たな診療体制の構築を進めていくことが必要と考えています。

最後になりますが、病院の基本方針の一つとして「人材の育成」が掲げられています。当センターは初期研修病院として大変人気があり、毎年23名の初期研修医を迎えています。後期研修においても当科では幅広い疾患を扱い、保存的加療から高度な手術まで行っており、重症例や救急疾患などを扱う機会も多く、幅広く種々の疾患を経験できる施設であり、耳鼻咽喉科の研修には適した施設と自負しています。これから大阪で耳鼻咽喉科研修を考えている若い先生方がおられましたら、一度われわれを訪ねていただければ幸いです。



当科スタッフ(屋上ヘリポートにて) 左から、浜中佳子聴力検査技師、武田和也医員、榎本圭佑診療主任、坂田義治主任部長、長井美樹医長、上塚学医員、山口恵子秘書